

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03021

研究課題名（和文）ポルトガル語の能力評価システムと理想的な言語教育シラバスの確立に向けた基礎研究

研究課題名（英文）Reconstructing the Language Proficiency Evaluation System and Learning Syllabus for Portuguese Language

研究代表者

市之瀬 敦（ICHINOSE, ATSUSHI）

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：20276512

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、言語能力評価システム、言語教育シラバス、能力評価検定試験、という3本の柱から大学レベルでの日本国内のポルトガル語教育を再構築化することを目指して着想された。国内外におけるポルトガル語教育の実状の把握から始まり、大学生を対象にパイロット的な能力評価試験を実施し、レベル別の語彙リストやフレーズ集、文法書の編纂も行った。さらに、ブラジル政府と連携したポルトガル語教育プロジェクトも胎動しており、今後の成果が期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ポルトガル語の教育は従来は経験値によって行われ、客観的な言語研究の成果に必ずしも裏付けられたものではなかった。それ故、近年の言語教育研究の成果を取り入れることが喫緊の課題と言えた。本研究で行ったパイロット的な能力評価試験の実施によって大学が公表している目標値との相関が図られたことやレベル別の語彙やフレーズ集の編纂、さらに標準的な文法書の提示などは今までにはなかった十分な社会的学術的意義が認められると言える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reconstruct the system for learning the Portuguese language in Japanese universities based on (1) the organization of an evaluation system of language capacity, (2) the establishment of an appropriate syllabus for studying Portuguese, and (3) the elaboration of a proper testing system. In this project, we investigated the actual situations of Portuguese language education in Japan and other countries and implemented an experimental evaluation and testing of the students taking a Portuguese language course. We edited lists of vocabulary at several levels, a phrasebook, and a grammatical reference manual as learning materials. Furthermore, an international education project has been started in collaboration with Brazilian Portuguese instructors and is expected to make valuable contributions to Portuguese language education.

研究分野：言語学

キーワード：ポルトガル語 言語教育 能力評価システム 教育シラバス

1. 研究開始当初の背景

ポルトガル語に関する外国語教育分野の研究は部分的なもので、教育の根幹にかかわるシラバスや評価法の問題を扱った総合的な研究は十分に行われていなかった。当時の状況は以下のとおりである。

(1) 大学の外国語教育においては、客観的指標となる外国語能力評価システムの必要性や評価システムと教育シラバスを連動させる必要性に関して、様々な言語に対し議論が高まっていた。ポルトガル語を専攻とする大学、ならびに、ポルトガル語を学士課程の中心に置く大学は国内に6校あり、それぞれが卒業時点での到達目標を公開していたが、必ずしも客観的根拠に基づくものではなく、経験値によるところが大きかった。また、ポルトガル語教育においては、近年の言語教育研究の成果を取り入れた学術的基礎にもとづく教育プログラムが十分に実施されているとは言い難い状況だった。

(2) 言語能力評価の目安となる検定試験に関しては、ポルトガル、ブラジル各政府の付属機関が実施している国際的な試験があるが、ポルトガル語教育に携わる大学関係者の間では、新たな外国語能力評価システムを導入する必要性、ならびに、外国語能力評価システムと大学におけるポルトガル語教育シラバスを連動させる必要性が将来的な課題として認識されていた。

2. 研究の目的

以下3つの内容を動的に解析することで、その成果を今後のポルトガル語教育に還元することを旨とする。

(1) ポルトガルやブラジルで行っている現行のポルトガル語能力検定試験や到達目標としてのヨーロッパ言語共通参照枠などを参考にしながら、日本における大学レベルのポルトガル語教育を想定した理想的な言語能力評価システムを確立するための基礎研究を行う。

(2) 日本語を母語とするポルトガル語学習者に特化した大学レベルの、あるいは中上級学習者に対して効率的なポルトガル語教育が実現できるような言語教育シラバスを明確化する。

(3) そのようなシラバスや能力評価システムに基づいた教育実践の成果として、試験的に能力検定試験を実施し、結果等を検証することにより評価方法と教育方法の統合を目指す。

3. 研究の方法

(1) ポルトガル語を専攻語として扱う国内6大学のカリキュラムや学習到達目標レベルについて、資料分析及び他大学の教員を交えた会合を通じて調査した。

(2) ポルトガルへ行き、現地の大学でカリキュラム、教授法、また日本人留学生の受け入れ状況、学習者の能力評価について聞き取り調査を実施した。更に、留学経験者を対象に学習困難に関する質問を含むアンケート調査を実施した。

(3) 日本語を母語とするポルトガル語学習者に特化した言語教育シラバスを明確化するために、ポルトガル語と日本語の比較対照研究や誤用分析研究を行った。

(4) CEFR-Jに基づいてレベル別のポルトガル語語彙集やフレーズ集を作成し、ポルトガルで作成された「頻度コーパス」や「運用コーパス」と比較しコーパスを分析した。

(5) 2年次の大学生を対象にポルトガルのカモンイス院が公開しているパイロット版の言語能力試験を試験的に実施した。また、この試験とポルトガルの検定試験(CAPLE)の問題を一部活用して、リスニング・文法・語彙の問題を含む独自のブラジルポルトガル語の能力試験を作成し

た。

(6)カリキュラムの改善に向けて、言語変種、学習成果、授業外活動について調査研究を実施した。

4. 研究成果

(1) 吉野・黒沢・市之瀬(2018)では、国内で受験可能なポルトガル語検定試験とポルトガル語を学士課程の中心に置く国内6大学における学習到達目標レベルとの関連を調査した(表1を参照)。現状と課題を検討し、「日本型ポルトガル語言語能力参照枠」ともいえる新たな参照枠を策定する必要性を論じた。本科研は、新たな参照枠の策定に向けた検討材料を提供するための基礎研究という位置づけである。

表1. 吉野・黒沢・市之瀬(2018)「表5:ポルトガル語の到達目標レベル」より

	京都外国語大学	神田外語大学	上智大学	天理大学	大阪大学	東京外国語大学
2年次	CIPLE (A2) DEPLE (B1)	設定なし	設定なし	設定なし	B1-B2 相当レベル	B1-B2 相当レベル
4年次	DIPLE (B2) Celpe 中級	Celpe 中級	DAPLE (C1) Celpe 上級	Celpe 上級	C1-C2 相当レベル	C1-C2 相当レベル

(2) 今日の大学では授業外においてもさまざまな言語教育活動や文化活動が行われている。授業内容を補完する場として、授業外活動をどのように行うことが効果的か調査を行い、その一部を報告書にまとめた。吉野(2018)では、スピーチコンテストとスピーキング指導に関する教育効果を調査した。今里・吉野(2019)、吉野・吉田(2021)では、神田外語大学多言語コミュニケーションセンター(MULC:マルク)で行われた活動をまとめ、その教育効果と教育意義を論じた。

(3) 2019年4月にポルトガルのコインブラ大学並びにポルト大学で外国語としてのポルトガル語教育に関する調査を行った。現地の教員らを対象に聞き取り調査を行い、教授法、授業内容、評価方法、また、日本人留学生のポルトガル語の運用能力及び留学先大学の授業への適応について調査した。帰国後にポルトガル留学経験者の学生を対象にブラジルポルトガル語とポルトガルのポルトガル語の違いによる学習困難についてアンケートを実施し、結果をまとめた。2017年に既に実施していた諸大学のカリキュラムに関する調査結果を踏まえて、ギボ(2019)「日本の大学におけるポルトガル語教育-言語変種をどう扱うか-」では国内の大学におけるポルトガル語教育の一つの課題として、ブラジルとポルトガルの両変種の扱い方の問題、ポルトガルのポルトガル語をより幅広く扱う必要性について論じた。以後も、カリキュラムの改善に向けて、ブラジルのポルトガル語とポルトガルのポルトガル語の比較研究、書き言葉と話し言葉を含む言語変種の扱い方の問題について研究を進めた。

(4) 2019年に黒澤が東京外国語大学のポルトガル語専攻コースの2年次に在籍する学生を対象にポルトガルのカモンイス院が公開しているパイロット版の言語能力試験を試験的に実施した。CEFRのA1からB2までのレベルの問題を対象に行ったが、B1からB2に移ると誤答が増え、かつ誤答の分布が全体にわたるようになった。実際に能力評価を厳密に行えばA2レベルの段階と推測されるものの、学生たちの能力はB1あたりに向かっているのではないかと判断された。実際の得点は以下であった(数値は得点、25点満点、カッコ内は人数): A1:25(10), 24(8), 23(2), 22(2), 21(2), 19(1)、A2:23(2), 22, 21(4), 20(5),

19(1), 18(2), 17, 16(2), 15(2), 14, 13, 12(3)、A 2 : 15(7), 14(8), 13(3), 12(3), 11(1), 10(1), 9(2), 8 (記述式を除く) B 1 : 15(10), 13(8), 11(2), 8(1), 5(1)、B 2 : 12(2), 11(1), 10(1), 9(6), 8(3), 7(4), 6(2), 5(1), 2(1).

- (5) 黒澤が実施した試験とポルトガルの検定試験 (CAPLE) の問題を一部活用して、吉野は B1 レベルのブラジルポルトガル語の能力試験を作成した。リスニング問題も作成、同レベルのスペイン語技能検定試験やフランス語技能検定試験の出題形式に沿った独自の文法・語彙問題も作成した。2022 年 1 月後半に大学 3 年生を対象にパイロット的に模擬テストを行う予定だったが、コロナ感染拡大時期と重なったため次年度に延期することとなった。B1 レベルを学部ポルトガル語専攻の全学生の到達目標とする大学もあり、テスト結果や本科研の成果をもとに言語教育シラバスや能力評価方法に関する研究をさらに進めていく予定である。
- (6) 黒澤は東京外国語大学における学内プロジェクトとの関連で、投野由紀夫が提唱する CEFR-J に準拠したレベル別のポルトガル語語彙集やフレーズ集の開発に関わり、すでにポルトガルポルトガル語、民衆ブラジルポルトガル語、教養ブラジルポルトガル語、モザンビークポルトガル語の 4 バージョンを完成させているが、特に語彙についてポルトガルでの語彙研究の成果との突合せを行った。ポルトガルでは 1984 年に *Português Fundamental* として語彙集が公刊されているが、これは、第 2 言語または外国語として 200 時間から 300 時間程度の学習段階を想定して 2217 語を提示したものであった。「頻度コーパス *Corpus de Frequência*」と「運用コーパス *Corpus de Disponibilidade*」という二つの手法を用い基礎語彙を収集・算定したもので、「頻度コーパス」から話し言葉における高頻度語彙を抽出し、「運用コーパス」は 30 の関心領域を設定し、書き言葉によるアンケートで関連語彙を取り出し、これらを専門委員会が基礎的な語彙リストとした。比較の対象とした CEFR-J 準拠版の語彙リストは A1 が 1030 語前後、A2 が 1350 語前後で、両者が重なっているのは 200 語前後で、A1 と A2 を合わせると 2000 語程度になり、リスボン大学による基礎ポルトガル語の語数とほぼ一致する (図 1 を参照)。頻度の特に高い語で A1, A2 の語彙と重ならないものをどう扱うかなど、語彙リストの再度の検討が必要であるとは判断されるものの、PF では動詞、A1A2 では過去分詞で登録されているなど、同源語で片方の語を知っていればもう一方の語を理解できるはずという語もあるので、試験的であるとはいえ、A1A2 の語彙リストもまんざらの外れとは言えないということは結論出来よう。

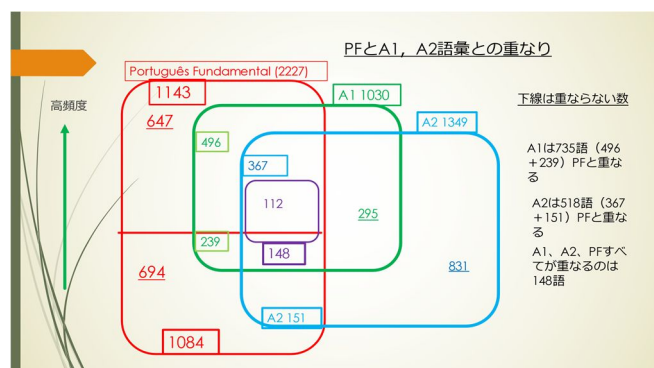


図 1. ポルトガル語の基礎語彙と学習レベルの語彙の重なり

- (7) 国内外で刊行されている教材を分析した結果に基づいた知見を活かし、市之瀬は 2020 年 1 月に『ポルトガル語文法総まとめ』(白水社)を刊行した。共著者はポルトガルのコインブ

ラ大学研究員のパウロ・フェイトール・ピント氏、ブラジルのミナスジェライス連邦大学准教授のレアンドロ・ディニス氏である。日本では、ポルトガル語の教材というと、とかくブラジルの変種を扱うものが圧倒的に多く作成されるが、本作はポルトガルで話される変種も対等に扱っている点が特徴である。

- (8) 2020年2月末には、コインブラ大学からパウロ・フェイトール・ピント氏を招き、2日にわたって講演会を上智大学で実施した。テーマは「世界におけるポルトガル語の言語政策及び教育の現状」および「社会言語学とポルトガル語教育の実状」に関する内容であった。関東でポルトガル語を教える大学教員やポルトガル語研究者がイベントに参加し、活発な意見交換がなされた。
- (9) 2020年に入り、ギボは他国との比較を行い日本の大学におけるポルトガル語教育の特徴や課題を知るためにカリキュラムの分析研究を進めた。例えば、日本の大学では日本人教員が日本語を使用して文法を解説し、ネイティブ教員が発音や会話を教えるという教育体制が一般的である。また、目標言語の文章を学習者の母語に訳すいわゆる訳読法が教授法として広く採用されている。日本人学習者に向けたポルトガル語教育の特徴、教員体制や学習環境の諸問題を考察し、より良い教育実践に向けての解決策を考案している。2020年8月にポワティエ大学が主催したオンラインセミナーシリーズで「PLE no Contexto Universitário Japonês: Panorama, Desafios e Estratégias」(日本の大学における外国語としてのポルトガル語教育-背景、課題、解決策-)という題目でその成果を発表している。
- (10) 研究の成果を活かし、ブラジルとの研究交流を実施している。2020年度末よりブラジル政府の言語教育プログラムで語学教師を養成する Idiomas Sem Fronteiras(国境のない言語)のプロジェクトに日本語母語話者を対象にしたポルトガル語教育の専門家としてギボが携わっている。日本の大学におけるポルトガル語の教育過程(カリキュラム)ポルトガル語と日本語の比較研究、日本人学習者の文化、言語能力など特徴を考慮した教授法をブラジル人のポルトガル語教師に教えるためのオンライン資格・養成講座を準備している。これは、アルゼンチン、アメリカ、フランス、オーストリア、マカオ、カボ・ヴェルデなどで働くブラジル人専門家が準備している講座と共に2022年内に公開される予定である。

<引用文献>

Português Fundamental, volume I, Vocabulário e Gramática, tomo I Vocabulário, 1984, INIC, CENTRO DE LINGÜÍSTICA DA UNIVERSIDADE DE LISBOA

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 ギボ・ルシーラ	4. 巻 第7号
2. 論文標題 日本の大学におけるポルトガル語教育 - 言語変種をどう扱うか -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 複言語・多言語教育研究	6. 最初と最後の頁 44-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今里和枝・吉野朋子	4. 巻 第8号
2. 論文標題 マルクの教育意義を考える ブラジル・ポルトガル語エリアの活動事例を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『グローバル・コミュニケーション研究』	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉野朋子	4. 巻 21
2. 論文標題 ポルトガル語スピーチコンテストとスピーキング指導 教育・学習効果に関する予備的調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 166-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野朋子・黒沢直俊・市之瀬敦	4. 巻 XLVII号
2. 論文標題 ポルトガル語能力評価システムと大学のポルトガル語教育	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Anais	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒澤直俊	4. 巻 特大号
2. 論文標題 ポルトガル語と標準語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学特大号	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野朋子・吉田京子	4. 巻 32
2. 論文標題 実践報告：神田外語大学多言語コミュニケーションセンター (MULC) 活動報告 (2017-2020年度) 多言語教育・文化活動の取り組み (総括と今後の展望)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語教育研究	6. 最初と最後の頁 195-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 ギボ・ルシーラ
2. 発表標題 O Ensino de PLE no contexto universitario japonês: panorama, desafios e estratégias
3. 学会等名 Conversas sobre ensino, aprendizagem e avaliação em Português como Língua Adicional/ Estrangeira (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ギボ・ルシーラ
2. 発表標題 ポルトガル語の未来と過去未来：推量及び伝聞マーカー
3. 学会等名 日本フランス語学会2019年度シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒澤直俊
2. 発表標題 ポルトガル語検定試験について
3. 学会等名 東京外国語大学ワールド・ランゲージ・センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒澤直俊
2. 発表標題 ポルトガル語におけるCEFRの適用：機能シラバスから文法シラバスへ
3. 学会等名 外国語教育学会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒澤直俊
2. 発表標題 ポルトガル語の基礎語彙について
3. 学会等名 CEFR-Jx28プロジェクト科研費基盤A(投野由紀夫教授代表)公開研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉野朋子
2. 発表標題 ポルトガル語スピーチコンテストとスピーキング指導
3. 学会等名 外国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 IYANAGA, Shiro; AIRES, Pedro; GIBO, Lucila
2. 発表標題 Futuro do presente composto e futuro do preterito composto em portugues: características do PE e PB
3. 学会等名 0 Coloquio e a Assembleia Geral da AJELB de 2021
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 市之瀬敦、パウロ・ピント、レアンドロ・ディニス	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 214
3. 書名 必携ポルトガル語文法総まとめ	

1. 著者名 Ribeiro, Alexandre do Amaral(Org.); Lucila Etsuko Gibo	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Pontes Editores	5. 総ページ数 219
3. 書名 Portugues do Brasil para estrangeiros: politicas, formacao, descricao	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉野 朋子 (Yoshino Tomoko) (30384176)	神田外語大学・外国語学部・准教授 (32510)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	G I B O L U C I L A (Gibo Lucila) (30737218)	上智大学・外国語学部・准教授 (32621)	
研究分担者	黒沢 直俊 (Kurosawa Naotoshi) (80195586)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 PINTO, Paulo. Politicas Linguisticas em Portugues e Educacao (ポルトガル語の言語政策及び教育)	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 PINTO, Paulo. A Sociolinguistica e o Ensino da Lingua Portuguesa (社会言語学とポルトガル語教育)	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関